

思

考

の

隅

景

まい。大村訳が「空」を取る背景には、儒教やキリスト教の含意の匂う「天」を避け、詩人の実存空間を揺るぎなく定位したい、とする訳者の、強靱な思想的基盤が投影されている。あくまで「天」に拘る日本キリスト教団出版局との違いは、明らかだろう。同志社大学構内への碑文設立に関わった「建立委員会編」訳では「天」の字を用いながら、「そら」とルビを振っている。そこには語彙の多義性に対する配慮と工夫が認められる。

3行目については「葉あいにそよぐ風にも」(伊吹訳)なのか、「葉あいに起る風にも」(大村訳)か、との論争が訳者同士で展開された。大村益夫は「風」パラムにファシズムの峻烈な暴風への詩人の抵抗を読む。伊吹訳では情緒に流れ、詩人を裏切っている、というのが大村の批判である。ハヌルとパラムのかかわりが最後の行の解釈を左右する。大村訳は「今宵も星が風に吹かれる」、伊吹訳は「今宵も星が風にふきさらされる」と一見大差ない。大村は尹東柱にあっては「「風」が時として「星」の存在を危うくする存在の意味」を帯びると述べているが、この哲学に比較して、実際の訳は素っ気ない。動詞は間島(カンド)地域の方言では受身だというのが、金時鐘訳はその点に理解が行き届かなかったためか否か「星が 風にすれて泣いている」と敷衍する。先行する金素雲訳の「星が風に吹きさらされている」は穏当だが、日本語として落ち着きすぎでは、との金時鐘の危惧が、やや過剰な訳語の提案に結びついたものだろうか。(以下次号)

詩の解釈をめぐる争論の彼方を透視する

尹東柱(ユン・ドンジュ)「序」詩の翻訳から見えてくるもの(上)

稲賀繁美
国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学教授

木下長宏『美を生きるための26章』は2009年の成果として歴史に残る名著だろう。アルファベットに沿って選ばれた26人の登場人物のイニシアルが振られたなか、Yは尹東柱(Yun Dong Ju 音同ユン)。著者の見事な読解に導かれ、『天と風と星と詩』の詩人について私見を述べたい。

尹東柱(1917-1945)は同志社大学在籍中に、従兄弟の宋夢奎とともに治安維持法違反の容疑で逮捕された。ふたりは前後して福岡刑務所で死亡している。状況からみて尹は、民族運動に挺身した同宿の宋に連座して検挙されたもの、と見るべきだろう。運よく破棄されずに生き延びた原稿に残された詩が、死後大きな反響を呼ぶことになる。

とりわけ人口に膾炙した通称「序」詩は、すでに11種を越える和訳を数える。ここにその全文を引く余裕はないが、その翻訳の詳細については、朴銀姫氏に詳細な検討がある。訳の比較読解により問題を浮かびあがらせよう。

最初の1行について、金時鐘訳(1981)は「死ぬ日まで天を仰ぎ」、大村益夫訳(1984)と伊吹剛訳(1984)はともに「死ぬ日まで空を仰ぎ」と訳す。原文の「天/空」はハヌルだが、キリスト教徒ならばそこに神の国を透視するだろう。また韓国の文脈では天空神ハムニムのことか否かなく想起される。「空」か「天」かで、すでにその含む意味に揺らぎが見える。詩人自らの意図を忠実に復元することを使命とする訳業がある一方、キリスト教なり民族主義なりにひきつけた解釈をもって正しいとみなす立場も、無碍には拒絶でき

思

考

の

隅

景

も、ある程度は納得させてくれるからだ。さらにそこには、現代のソウルでは古拙とも響く北方移民の方言の雄渾な素朴さが、木魂してもいるようだ。

2009年夏、尹東柱が生まれ、中学時代を過ごした旧間島省、龍井を訪れた。旧「大成中学校」敷地内には、2002年の韓中国交樹立後、記念碑が建てられた。当時の校舎を改装した歴史展示館では「抗日教育史」が展示され、多くの韓国人団体客の寄付を集めている。説明文には尹はマルクスの著作に親しんだ旨特記されているが、日本側で知られる蔵書記録とは合致しない。韓国では抵抗・愛国の抒情詩人として崇敬されたが、日本では基督者としての内面的精神性が強調されてきた。矛盾した解釈が錯綜し、訳者同士で訳語の是非をめぐって熾烈なまでの争論が展開されてきた。

はたして詩の翻訳の重層とは、基点をなす詩人の極私的な宇宙へと収斂してゆくべきものなのか。それとも池に投げ込まれたひとつの石のように、読み継がれるにつれて波紋を広げ、拡散し反響し、増幅と減衰の内に、やがて普遍性を獲得してゆくものなのか。木下長宏の著書でも、Y章の最後に金柔政訳による訳が提案されている。「詩の国」朝鮮の宮澤賢治一隣国のこの国民詩人の魂に触れる機会が「みなさん」にも恵まれんことを。

*木下長宏『美を生きるための26章 芸術思想史の試み』(みすず書房、2009年) (了)

詩の解釈をめぐる争論の彼方を透視する

尹東柱(ユン・ドンジュ)「序」詩の翻訳から見えてくるもの(下)

稲賀繁美
国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学教授

(承前)尹東柱の「序」詩解釈において大きな論争を招いたのは、その直前、大村訳で「あらゆる死にゆくものを愛さねば」とあるのが、伊吹訳では「生きとし生けるものをいとおしめねば」と裏返された点だった。木下長宏も、伊吹訳は日本の詩的伝統に無理に引き寄せて、原詩を損なっていると批判する。伊吹は自説の正しさを抗弁しており、同志社大学構内や京都造形芸術大学に据えられた碑文にも伊吹訳が採られている。生死は表裏をなすが、原詩が敢えて「死」 mortal を慈しむ姿勢に貴かれていることを確認したうえで、再び最終行に戻ってみよう。

原風景は、間島の内陸・広大な盆地から仰ぐ天蓋に輝く星が、風に揺らぎ瞬く様だろう。詩作の季節は不明だが、澄んだ秋空か、寒風荒ぶ凍てついた冬空が想起される。木下は悠久の歴史の象徴たる「星」が、地上にまでその手を伸ばし、詩人の存在を託した「風」にそっと触れる様子を感じとっている。先行する様々な解釈の葛藤を吟味した末に愛沢革(2009)は「星が風に身をさらす」と訳した。ここには遙かなる天空の存在が、大気圏の攪乱に翻弄されつつも、地上の人間に触れようとする意志が託されている。原語の受身表現は、日本語では生かし難い。とはいえ、そこに受動の語法があり、ウンダの音には「泣く」の意味も含まれている。この知識は無意味ではあるまい。とても訳しきれないこのスチウンダという音のもつ深みと多義性とを、言葉を解さない読者に